

戦後七十一年の歩みのために

「戦後の足跡を問う」

理事長 田澤昭吾

「戦後七十年」という節目の年も、あつという間に過ぎ、早いものでもう四月を迎えてしまいました。

しかし、「戦後七十年」という節目を迎え、「戦後の足跡を見直そう」と提示された命題は、まだ始まったばかりです。

昭和二十年八月十五日、ポツダム宣言を受諾し、玉音放送で終戦を迎えた日本は、その後、連合国軍総司令部（GHQ）の管理下に置かれ、アメリカのマッカーサー元帥の指揮下で占領政策が進められていきました。

事実上、アメリカの単独支配で
す。
アメリカの「戦後対日政策」
の基本目標は、一九四四年五月
四日付の「日本に関する合衆国
の戦後目標」の文書に、「日本
がアメリカと他の太平洋諸国に
対する脅威となることを防止」
し、「日本に他国の権利と国際
義務を尊重する政府を確立する
こと」と記されています。
この二つの基本目標を達成す
るためにアメリカは、日本占領
直後の武装解除、軍事施設の破
壊等の諸政策を実施していきま
した。そして、超国家主義的傾
向を根絶するためという理由
で、「日本の精神非武装」政策
を推し進めていったのです。そ
れは、大東亜戦争での日本軍が、

一人になっても敵に敢然と立ち向かってくるその姿が恐怖でもあったからだそうです。このことは、上智大学の渡部昇一名誉教授の講演でお聴きしました。そして、日本人のこの強さは、神道教育を背景とした愛国心と、天皇陛下に対する忠誠心によるものだとアメリカは研究したそうです。そして、天皇及び国家神道は日本国民を侵略戦争に駆り立てた元凶だと位置づけたのです。その結果を受けて占領軍アメリカは、神道指令を発し、神道排斥等の施策を推進し、学校教育から神道による宗教情操教育、神話教育を除去していったのです。こうした占領政策下で、歴史

の教科書がアメリカによって作成され、「太平洋戦争史」として全国に配布し、日本をアジアの侵略国、及び世界の平和を脅かした侵略国家だというイメージ作りが図られて行っただけです。更には、明治憲法を廃止し、新たに日本国憲法の草案を作成し、それを国会で議決させるといふ暴挙に出たのです。

こうした占領政策について渡部名誉教授は、第二次世界大戦勝利国は、占領軍としてがやっしてきた時、「第一次世界大戦までの文明国が、戦勝国になつたからといって決して行わなかつた政策を行なつた。一つは神道指令。神道に対する干渉である。もう一つは、日本人から歴史を奪つたことだ。日本の歴史を、

軍国主義で暗いものだ」と辱めた。これは東京裁判と歩調を合わせて行われ、大東亜戦争のみならず、日清、日露戦争までの歴史を真つ黒にしてしまった」と糾弾しています。(『「戦後」混迷の時代から』参照)

そして、国民道徳であった修身及び教育勅語を廃止したのです。

まさに、こうした戦後占領政策のねらいは、日本弱体化であったのです。そのために、日本人の精神非武装政策を推進して行ったのです。

日本人は、初期戦後史のこうした事実をしっかりと認識しておくべきです。

更に、渡部名誉教授は、日本文明の核は皇室、神道、日本文

化された仏教の三つで、その一つである皇室の特色は、神話の時代から現代まで続いている歴史を保持していることだと、前書で述べています。そして、こうした国は、世界で皇室の伝統を守り続けている日本だけだとも述べていました。

確かに、世界の文明国で、神話の系図を現代まで守り続けているのは日本だけです。そして、天照大神の子孫である神武天皇を初代天皇とし、それを男系で今日まで一二五代守り続けています。日本文明は、まさに人類の宝だとも記していますが、まさに共感します。

日本は、こうした日本文明を更に未来永劫に繋げようとしていく国なので、そのことを

誇りに感じますし、松風塾高校
ではこうした日本の国風（くにぶり）
を誇りに思い、戦後七十一年の
歩みを進めて行きたいと思っ
ています。こうした思いに同憂同
願の士の多きを期待します。

（平成28年4月、補筆して記す）